

インクルーシブ教育支援室における3年間の 「学生の居場所」活動の振り返りと展望

吉 村 麻奈美
松 崎 良 美
貝 原 千馨枝

1. はじめに

「居場所」とは何なのだろうか。

「居場所」という言葉が教育場面で用いられるようになったのは、不登校が問題視されるようになってきた1980年代からのことである。以降、「居場所」はさまざまに議論、研究されるようになり、1992年に文部省が「心の居場所」という表現を使用したことが端緒となって、従来の物理的空間の意味合いのみならず、心理的な意味も含むものとして用いられるようになった。心理的居場所とは、「心の拠り所となる関係性、および安心感があり、ありのままの自分を受容される場」(則定、2008)であるとされる。現在では、「居場所」という語を聞いたとき、心の居場所について連想する人も多いことだろう。

とはいえいささか漠然とした印象を拭えない「居場所」の構成要素を探るには、尺度研究が参考になる。杉本・庄司(2006)は、「居場所」の心理的機能として「被受容感」「精神的安定」「行動の自由」「思考・内省」「自己肯定感」「他者からの自由」の6因子があることを明らかにした。石本(2010)の作成した「居場所感を捉える尺度」は、自分が必要とされていると思える、役に立っていると思えるといった「自己有用感」と、ありのままにいられる、自分らしくいられるといった「本来感」の2因子から成る。原田・滝脇(2014)も「居場所感尺度」を作成しているが、こちらの尺度では社会的居場所と個人的居場所の2通りの居場所が測定される。社会的居場所は「所属的居場所」「受容

的居場所」「承認的居場所」という3つの下位尺度から成り、個人的居場所は「内省的居場所」「開放的居場所」という2つの下位尺度から構成されている。

原田らの尺度研究が示したように、居場所とは他者との関わりで生じる社会的居場所と、一人で過ごせる個人的居場所に分類されるという考え方がある(石本, 2009; 原田・滝脇, 2014)。原田らの定義によれば、社会的居場所とは「他者の存在により、自己有用感や役割感、被受容感、帰属意識を実感できる場や関係」であり、個人的居場所とは「一人になることで、緊張の解消や自己内省を安定的にできることにより、自己にまとまりを与えることができる場や時間」とされる。大学生以前の発達段階においては他者との関わりの影響がより大きいと考えられるが、アイデンティティを追求することが発達課題の一つでもある大学生においては、個人的居場所のさすような場の存在もまた必要であるといえよう。

このように「居場所」についてより考えることになった背景には、大学における大きな変化が影響している。津田塾大学において、2017年度より「ターム制」が導入された。ターム制とは、それまでの前後期制と異なり、年間を4つのタームに分割するものである。うち、第2タームに必修講義を作らず自由度を上げることで、インターンや研修といった学生の学外活動を奨励するという利点がある。第2タームにはセミナーも行われないため、学生によって主体的に学外学修に励むこともあれば、ほぼ夏季休暇同様に過ごす者もある。

ターム制導入により浮上した心配は、6月中旬に早くも第2タームという、人によっては夏休みのような時期に入ってしまうため、適応に時間のかかる新生が、友人づくりを達成できず、また学内の得たい情報を思うように入手できないままに、早々に大学を離れてしまうことである。それにより、夏季休暇明けの通学に困難が生じることはないか、不安なまま数ヶ月過ごすことが心身の健康に影響しないかということが懸念された。このような心配から、この第2タームに少しでも学生同士の横のつながりを作りたいということが当初の思いであった。つまり、社会的居場所に近い「横のつながりを作る」ということが後述する企画の居場所イメージの一つであったということもできる。直接的に促進したかったものは学生同士のつながりであったが、より広く捉えれば、新生(あるいは適応に困難を抱えている学生全体)と大学とのつながり、ということも意識されていた。

そのために新たに立ち上げた企画が、新生を主たるターゲットとしたグループ活動である。ただし、新生と限定せずに、間口を広くしておくこと

により、友人の出来にくい学生が一人でやってきたとしても、学科や学年を超えて誰かとつながり、得たい情報に近づける仕組みを作りたいと考えた。なお、第一筆者の所属はウェルネス・センターの学生相談部門であるが、インクルーシブ教育支援室のアドバイザーを兼任している。インクルーシブ教育支援室は、本学の修学支援組織、全学インクルーシブ委員会の関連組織としても在るものであるが、TAの大学院生複数名、ボランティア学生多数を抱えており、上記企画を実施するために最適であった。そのため、インクルーシブ教育支援室において、関係者や部屋を巻き込んで企画を行うこととした。

日本でも海外でも、多くの学生相談機関がグループ活動を提供している。その内容はまちまちであり、大学ごとの個性や状況を反映している(吉村、2019)。吉村(2007)は、それまでに発行された大学におけるグループ活動に関連する研究を概観し、「居場所」「対人関係」「自己理解」といった成長の場としての機能を有している、とまとめた。グループは、安息の場、対人関係の場、体験の統合や自己理解、自己解決を助ける(岩村、1999)、あるいは、学生生活における孤立からもたらされる不安感を軽減し精神的安定や安全感を保つための居場所の提供、自由で安全な場の提供、等(屋宮、2007)の機能を持っている、とされる。すなわち、グループ活動を提供することと「居場所」を作ろうとすることは意義としては近く、なかでも前述の「社会的居場所」に相当すると考えられる。

2. 本学でこれまで行ってきたグループ活動の概観

2-1. 着想と当初の目的

かつてウェルネス・センターの学生相談部門にて、夏季休暇中に自然豊かな場所でのピクニックを企画したことがあるが、参加者は集まらなかった。その際の発想は、あまりに休みなく勤勉に活動する学生たちに、少しでも休養とリフレッシュの意義を体感してもらいたいというものであった。しかしながら、そうした主催側の一方的な考えでは学生は集まらない。本学の学生に特徴的な事情、例えば学部生が主体であり夏季休暇中は大学から離れる学生が多いこと、真面目な傾向にある上に課題が多く多忙な学生の多いことなどを、考慮する必要がある。また企画内容や、周知方法等の影響もあるだろう。本学に合わせた企画を考案するためには、学部生や大学院生の意見を得ることも大切な過程であるように思われた。既述のようにいくつかの要因から、2017年度よりインクルーシブ教育支援室において大学院生TAや学生と

年齢の近い助教などスタッフの手を借りながら、グループ活動を企画することとした。

構造は、「インクルーシブ教育支援活動室」を用い、所定の時間、筆者および大学院生や助教が常駐し、出入り自由とした。常駐するメンバーは年度ごとに異なるが、アドバイザーである教員、その年度の担当者になったスタッフは基本的に毎週出ることとし、欠席する場合にはスタッフ間で連絡を取り合った。「インクルーシブ教育活動室」とは、本館2階に位置する、TAやボランティア学生の出入りする部屋である。基本的には開放されているが、不定期に、関係者のミーティング、修学支援を希望する学生との面談等に用いられることがある。また、第2タームは6週間あることから、週に一度、計6回活動を行った。以下、三カ年の活動状況についてまとめるが、この構造は基本的に維持され続けている。

2-2. 2017年度の活動状況

2-2-1. 活動状況の実際

2017年度は「生活や学びに関する質問部屋」と題し、質問したい学生や話をしたい学生が自由に出入りできる場所を設けることとした。アドバイザーである教員、インクルーシブ教育支援室のTAである大学院生1名は基本的に常駐し、助教やボランティア学生が応援に入った。

教員と大学院生がいても、全ての質問事項に答えられるわけではないことから、答えられない場合には適切な窓口の情報を提供することとした。似たような困りごとを待つ学生が複数現れた場合、互いに話せるようなグループ的機能も持てるように考慮した。

また、来室した大学院生や上級生には、自分の体験やお勧め事項をカテゴリごとに記したノートを作成してもらった。それにより、直接的に会話することができないとしても、先輩たちの意見に触れる機会が得られるように意図したものである。また、ノートの記述は蓄積するものであるから、将来的に大きな情報源になるであろうこと、そして話題づくりにも役立つのではないかと考えられた。ノートに設けられたカテゴリは、「講義」「アルバイト」「留学」「旅行」「サークル」等、学生の生活に密着した、かつ、網羅的なものであった。

周知に用いたツールは以下の通りである。ポスター、教員へのチラシ配布、教授会での周知、Facebookのインクルーシブ教育支援室ページ、インクルーシブ教育支援室のwebサイト、ボランティア学生メーリングリスト。

既述のように、週に一度、6回開催した。水曜日の3限の時間に相当する13時から14時を質問部屋企画の実施時間とし、14時から14時半の30分をスタッフミーティング(反省会)の時間とした。

2-2-2. 振り返りと課題

初年度ということもあり、コンセプトの決定やチラシ作成等に時間がかかり、周知が6月第1週になってしまったことは、大きな反省点である。特に、新生生に対するセミナー担当教員からの直接的・間接的告知を有力視していたが、セミナーは軒並み最終回が終了した後となった。従って、教員に告知はしたが、宣伝効果はあまりなかったと思われる。

参加学生は、各回1～2名であった。上級生のボランティア学生がノートを書きにきてくれることもあったが、いずれも一人でやってくる学生が多い。前半にふらりとくる学生が目立ち、後半は減少傾向にあった。質問内容は、第2タームの過ごし方、留学やアルバイト、サークルのことなどであり、生活に密着した質問をしにくるケースが多かった。

2-3. 2018年度の活動状況

2-3-1. 活動状況の実際

2018年度は、「質問部屋」の他に、心理教育的セミナーやワークを用意し、学生の集まり方を見ることとした。具体的には、隔週で2017年度と同様の「学びや生活に関する質問部屋」、その他の週に「心理検査を通した自己理解」、「自己主張の苦手なあなたへ」、「不器用な人のためのお菓子作り講座」、を配置した。詳細は後述する。質問部屋の運営は前年度と同様とし、ノートも2017年度のものを、続けて使用することとした。

企画の実際：

〈心理検査を通した自己理解〉

質問紙とその結果に関する教員からのフィードバックを合わせたミニワークショップ形式。専任カウンセラーでもある第一筆者が、性格に関する心理検査を数種用意し、希望する学生に実施した。心理検査は、TEG(東大式エゴグラム)、YG性格検査を用意した。また、キャリア相談窓口における職業興味検査等、学内において常時心理検査を扱っている窓口の情報も提供できるよう用意した。

2名の学生が参加したため、心理検査および解説実施後、互いに検査結果に関するポジティブ・フィードバックをし合う時間を設けた。

〈自己主張の苦手なあなたへ〉

アサーション・トレーニングの実践的なミニ・セミナーである。アサーション尺度により自らのアサーション度を測り、「どのような事柄(場面)において、言いたいことが言いにくいか」という場面を想定したやりとり、適切な自己表現を行うためのセリフづくりのステップの教授および実践で構成した。2名以上の参加を想定し、相互に交流するワークを複数用意していたが、参加が1名であったため、ワークでは教員と参加学生とのやりとりが中心となった。

〈不器用な人のためのお菓子作り講座〉

調理を含む企画であるため、企画段階からウエルネス・センター所属の管理栄養士の協力を得た。オープンや冷蔵庫、その他器具類を使わずに簡便に作るができる菓子をリストアップしてもらい、スタッフと検討し“トライフル”と“モヒート風ドリンク”を作ることとなった。当日は、管理栄養士からのミニ・レクチャー(自宅でできる簡単なお菓子の装飾の工夫、トライフルの作り方)ののち、皆でトライフルおよびモヒート風ドリンクの作成と実食を行った。参加者は、インクルーシブ教育支援室のスタッフも含め、6名であった。

周知に用いたツールは以下の通り。Tsuda net、ポスター、教員チラシ配布(時期を2017年度より早めた)、教授会での周知(2017年度より1ヶ月早めた)、Facebookのインクルーシブ教育支援室のページ、webページ、ボランティア学生メーリングリスト。前年度の反省を踏まえ、チラシ作成をスムーズに行うよう努力し、周知時期を早めた。

企画は週に一度、6回開催した。水曜日の3限の時間に相当する13時から14時を質問部屋企画の実施時間とし、14時から14時半の30分をスタッフミーティング(反省会)の時間とした。

質問部屋以外の3セミナー実施時に、参加学生にアンケート記入を依頼した。結果のうち抜粋したものを表1に示す。

表1 2018年度の参加者の感想(抜粋)

参加イベント名(学年)	感想
心理テストと自己理解 (学部生)	性格検査と、参加者同士のフィードバックをすることで、自分の性格の大体の傾向と、どうしたらそれを活かせるかを考えるきっかけに繋がりました。
心理テストと自己理解 (学部生)	自分の中で過大評価していたひとつの性格がありましたが、それほど心配なくて良いのだとわかりホッとしました。また、今まで自分について思っていたことが、当てはまることも多かったので、自分の中の自己評価もそれほど間違っていないのだなと思いました。
自己主張が苦手なあなたへ (学部生)	自分は自己主張は苦手なのですが、今回習った方法がとてもためになり、今後自分の意見を言う時にこの方法を使ってうまく人に主張できたらいいなと思います。
不器用の人のお菓子作り講座(学部生)	率直にとても楽しかったです。普段なかなかお話しできない方と交流できてとても良い時間を過ごせました。最後には栄養士の先生からアドバイスもいただいて、簡単にQOLは上げられるのだなとわかり、食べること、作ることへのモチベーションが高まりました。
不器用の人のお菓子作り講座(学部生)	とても楽しかったです。市販のものを少し手を加えるだけで美味しく、楽しく食べられると言うのがわかってよかったです。
不器用の人のお菓子作り講座(学部生)	普段お菓子作りをしないので、新鮮でした。普段一人で食べることが多いので、人と楽しくお話をしながら食べると充実した食になるんだなと思いました。

2-3-2. 振り返りと課題

集客の点から見ると、アサーション・トレーニングのように相互交流を狙った企画に1名しか来ないなど、課題が山積する状況である。表1のように感想は好意的であるから、不参加の要因を探る必要があると考えた。

2018年9月に、筆者が必修講義の受講者を対象に本企画に関するアンケート調査をおこなった。一般学生から得られた回答は、本企画の課題が浮き彫りとなるものであった。詳しくは吉村(2019)に記載してあるが、こちらではまとめて記す。質問項目は、「どのようなグループ活動だったら参加してみたいと思いますか」「適当な実施場所」「適当な実施時期」「インクルーシブ教育支援室で行なった企画について知っていたか」「どのような媒体で告知をすると伝わりやすいと思うか」等であった。結果は、実施場所は学内、実

施時期はターム中の平日が適当と思う意見が多数であった。またイベントを「知っていた」とした者は2名であった。適当な告知方法については、Tsudanet、メール、授業での告知、掲示板の順であった。つまり、一般学生から得た回答は、既に実施している内容や、既に実行している告知媒体を使った告知であった、ということになる。

希望する活動内容については、料理や討論など多彩なものが挙げられていた。アンケート結果を鑑み、2019年度に向けて、スタッフ間で心理教育的セミナーやワークの内容を再検討した。

また、本企画に関心を持つ学生と、母体が同じである“インクルーシブ教育支援研修”という第2ターム開講の研修に参加する学生にはある程度の重なりが想定されるが、これらが同じ時間帯(水曜3限)に開催されているため、曜日や時間帯が重ならないように工夫することが提案された。

2-4. 2019年度の活動状況

2-4-1. 活動状況の実際

2019年度も「質問部屋」を設け、他に心理教育的セミナーやワークを用意することとした。具体的には、隔週で「学びや生活に関する質問部屋」、その他の週に「一人で休める場所探し」、「自己主張の苦手なあなたへ」、「不器用な人のための食事講座」、を配置した。前述の再検討を経て、アサーショントレーニングのみ前年度と同様のものを用意し、場所探しと食事講座は企画内容を新規に作成した。質問部屋の週は前年度までと同様とし、ノートも2017年度からのものを続けて使用することとした。

企画の実際：

〈一人で休める場所探し〉

人付き合いで疲れてしまった時や、パニック的になった時に落ち着けるような、学内で一人でも心地よく過ごせる場所を探すマッピング企画である。以前、インクルーシブ教育支援室にて「学内の休憩場所(ベンチなど)」の情報をまとめていたため、そのさいの資料も参考資料として扱った。ほか、学内の見取り図などを資料として用意した。まずは企画趣旨を掘り下げ、「どのような場所を求めているか」「自分の考える一人で休める場所」等の情報交換の時間帯をもち、その後校内をツアーするという段取りとした。ところが学生の参加者がなかったため、職員1人とスタッフ3名でツアーを行った。

〈自己主張の苦手なあなたへ〉

内容は2018年度と同様であるため省略する。1名の学生が参加したため、

第一著者が司会をし、スタッフ2名もメンバーとして参加しながらプログラムを進めた。参加学生が日常的に経験している主張できず困った場面を例に挙げ、その例に対する自己主張のワークをスタッフ全員で行い、感想を述べ合った。

〈不器用な人のための食事講座 “試してみよう！コンビニアレンジごはん”〉

本企画も2018年度同様、調理を含むため、企画段階からウェルネス・センター所属の管理栄養士の協力を得た。オープンや冷蔵庫、その他器具類を使わずに簡便に作ることができ、かつ栄養面も意識した料理を考案してもらい、事前ミーティングにてスタッフと検討した。その結果、コンビニで購入した食べ物を簡単に組み合わせる“コンビニアレンジごはん”を各自の裁量で作ることとなった。当日は、前もってコンビニエンス・ストアに買い出しに行き、値段がはっきりとわかるよう、購入した食材に油性ペンで値段を記入し、机に並べた。はじめに、参加学生の簡単な自己紹介と食事についてどのように困りごとがあるかを話してもらい、適宜管理栄養士からのコメントを貰った。ついで管理栄養士から、具体的な食材と栄養、“選択力”といったトピックでミニ・レクチャーを行なった。その後、皆で好きに食材を組み合わせ、実食を行った。実食の際には、スープ類にお湯を使うための電気ポット、白米を温めるための電子レンジのみを使用した。参加者は、学生5名とスタッフ4名であった。

周知に用いたツールは以下の通り。Tsuda net、スタッフが担当する授業内での告知、ポスター(枚数を増強)、教員へのチラシ配布(2018年度よりさらに早い時期とした)、教授会周知、および各教員によるセミナーにおける告知、インクルーシブ教育支援室 Facebook、ボランティア学生メーリングリスト。2019年度の告知用素材を、付録として末尾に付す。

これまで同様、週に一度6回開催した。曜日は前年度の反省を踏まえ、インクルーシブ教育支援室の行事と重ならない金曜日に移動した。時間帯も3限が入っている学生に配慮し、昼休みと3限にまたがる時間帯、12時15分から13時30分までの開催とし、途中参加途中退室を可とした。

また、2019年度は第2ターム期間中に校舎の耐震工事があり、インクルーシブ教育支援活動室とインクルーシブ教育支援室が通常の間所から引越えし、これまでは2部屋に分かれていたものが、1部屋を共有する形で使用するという特殊な状況下にあった。そのような空間の違いにより、企画実施中に明確な困難は生じなかったが、遅刻してきた学生がいたことを考えると、開催場所・時間帯変更の影響は多少はあったかもしれない。

質問部屋以外の3セミナー実施時に、参加学生にアンケート記入を依頼した。抜粋したものを表2に記載する。

表2 2019年度の参加者の感想(抜粋)

参加イベント名(学年)	感想
自己主張の苦手なあなたへ(学部生)	自分も相手も尊重して言いたいことを伝えることを自己主張だと意識したら、これまでよりも相手に伝えたいことが伝えられそうな気がしました。いろんな考え、意見、言い方を聞いたことで、たくさんヒントがもらえたのでとてもありがたかったです。
自己主張の苦手なあなたへ(大学院生)	テストをしてみて、自分一人ではなく他の皆さんと出来たので自分の感じ方と他の皆さんの感じ方がどのくらい違うのか知ることができ、また建設的にどう話していけば良いかヒントを得ることができたように思います。結構言いたいことはあるけどどう言えば傷つけずに伝えられるか考えてしまうことが多いので、この方法使ってみたいと思います。
不器用の人のための食事作り講座(学部生)	一人暮らしに慣れ始めてバイト後帰宅してから料理を作る気が失せてしまって困っていましたが、主食にプラスしてタンパク質をとることの重要性や温泉玉子の万能さを知ることができて、とてもためになりました。
不器用の人のための食事作り講座(学部生)	コンビニにあるものでたくさんのアレンジができることを知り、とても勉強になりました。いろいろアレンジを試して、食事を楽しみたいと思います。
不器用の人のための食事作り講座(学部生)	コンビニの食べ物、商品を組み合わせるという発想が新鮮でした。自由にチャレンジするみんな(参加者)に刺激をいただきました。
不器用の人のための食事作り講座(学部生)	コンビニ食のアレンジを様々知ることができて、将来の一人暮らしの際の参考になりました。コンビニがこれほど使えるとは思いませんでした。

2-4-2. 振り返りと課題

2019年9月に振り返りミーティングを行った。内容は、各回の参加状況、参加者についての振り返り、アンケート結果を見ながらの反省、等であった。

純粋な参加学生が来ず、ボランティア学生だけになった場合についても検討がなされた。これまではノート記入を促したのみであったが、サポーターの上級生としてきていても、話したいこともあるかもしれず、必ずしも「困

ている人」と「サポートする人」を二分するような構造にせず、「(そのテーマについて)話したい人が来ている」と捉えてもいいのではないかという考えが出された。

2019年度は「一人になれる場所探し」のように、学内を移動する形式の企画が登場した。全ての企画を途中参加・途中退室OKとしているため、同ルールとするものの、一度ツアーに出てしまうと、遅刻者に対応できないという事態が生じた。移動式企画の際に遅刻者をどのようにフォローするかという点は、1つの課題である。

周知方法の問題については、ターゲットを明確にするかどうかという議論へとつながった。「カウンセリングに行くほどではない」と思っているが、多少困っている人が気軽に話しに来てよい場所、つまり、カウンセリングとの中間的位置を目指してはどうかという意見が出た。話をする中で気づきを得た場合、それにより解決するかもしれないし、適切な窓口に足が向くかもしれない。「特定のトピックの専門ではなくても、話ができる場所」であり、「それほど困っていない」という人にも開かれているとよいという意見が見られた。そのニュアンスをチラシ等にどのように反映するかということも、また課題である。

2019年は前半の参加者が少なく、0名の時もあり、次第に増えるという傾向にあった。すなわち、相変わらず参加者数が伸びにくい状況にある。しかし一方で、「去年のポスターを見て気になっていた」という情報を得たり、リピーターの学生がいたり、学生同士が繋がることなど、当初目論んでいたことがゆっくと生じ始めている、という感触もある。

次年度に向け、本企画の認知度がまだまだ低いことから、企画内容がわかるような掲示物を長期間貼り出すことが提案された。具体的には、インクルーシブ教育支援室の掲示板に、写真等を含めた本企画のまとめを貼り続けるという案であった。チラシにも過去の写真等を追加することで内容や雰囲気を伝え、「わからなさ」による敬遠を減少させる目論見である。

2-5. 3年間のまとめ

2-5-1. 学生の動向

大学側の様子は学生の動向に影響する。「第2ターム」新設をきっかけに進んだ本企画であるが、大学もまたこの「第2ターム」をめぐるっては試行錯誤を繰り返している。例えば、毎年第2タームの科目の置かれ方が異なっている。その状況は本企画にも少なからず影響しているといえよう。例えば、

2017年度は第1週にふらりとやってくる新入生が目立ち、後半は参加者が少なくなっていく。逆に2018年度と2019年度は、始めが少なく、第6週の参加者が最も多かった。大学の動向が定まらないうちは、前年度との比較、その年度のシラバスから検討するなど、丁寧に状況を把握していくことが必要となるだろう。

大学の変化の影響は、使用する告知ツールにも現れる。2017年度の中盤頃から、告知事項はTsuda netと全員宛メールに一本化され始めた。発信する側からすれば簡便であるが、受信する側の学生は、情報過多となり見逃しという現象も起きやすくなる。学生にとってはTsuda netが最も頻繁に確認するツールであるようだが、必ずしもこちらの情報が拾われていないことについて、対策を考える必要があるだろう。

2-5-2. 実施側の課題

当初「こういう学生に来て欲しい」と考えていた層に、本当にきてもらっているのだろうか。そういった学生たちに果たして情報は届いているのだろうか。感触としては、NOである。実際の学生の声聞いてみれば、「気になってはいたが、躊躇してしまい行けなかった」というケースもある。ただしそれは、告知が届いているケースである。

告知の課題は大きい。既述のように刻々と変化する、現代の大学生が親しんでいるコミュニケーション・ツールについて、告知する側もアンテナを張っておき、繰り返すことや強調することも考えなければならない。その一方で、たとえ1回の告知でも、学生にとって本当に魅力的な企画であれば、多忙さの隙間を縫ってでも参加したいと思うのかも知れず、「学生の目線に立つ」ということの難儀さが思い知らされる。

既述のように、2019年度はリピーターの学生が現れたり、過去のポスターの影響があるなど、「毎年継続して行なっている」効果も出始めているような手応えがある。継続していくことも一つの目標である。

3. おわりに

3-1. 本企画と「居場所」との関連

「社会的居場所」の実感には性差が見られ、女性の方がより実感しやすいというデータがある(原田・滝脇、2014)。女子大である本学にとって、興味深い結果といえる。大学生を対象とした居場所感の研究では、次のような

知見もある。千島ら(2016)は、キャラがあることで居場所感が獲得できるということを明らかにし、また、永井(2018)は、スキル成熟傷つき回避群とスキル成熟親密関係群において、居場所を実感しやすいことを示した。これらの結果は、ゼミやサークルにおいて、社会的スキルが高い学生の方が居場所感を得やすいことを示している。社会的スキルが高くはない学生たちでも、安心して振る舞えるような場を作ることは、本企画の目標の一つとなると思われる。

一方で、本企画の物理的限界にも触れたい。「居場所」は、恒常的に存在している空間で、利用者が必要に応じて行くような場であることもある。例えば、花嶋(2011)はひきこもりの若者が居場所を利用しながら社会と関わるまでのプロセスについて質的に分析している。花嶋論文では、居場所、たまり場、フリースペースなどと呼ばれる中間施設の総称として「居場所」が用いられている。そのような場からみると、本企画で使用する部屋は多機能もっていて、常に自由に出入りすることはできない。もしも本企画時に「社会的居場所」的な場となり、企画のない時に一人でゆったり過ごしても良いような「個人的居場所」になりうるとしたら理想的であるが、後者については制約のある状況だ。

その点、2019年に開始した「一人になれる場所探し」は、まさに「個人的居場所」と深く関連する内容である。「個人的居場所」は「社会的居場所」と異なり主観的幸福感とは関連しないとされる(石本、2010)ものの、気遣いをしすぎる学生が人と離れて安息を感じることでできる場所、自己内省と内的成長のできる場所、あるいは発達障害傾向を有する学生が人混みで混乱した際の避難場所、など、多くの学生にとって重要な意味を持つものである。学内に一つでも、できれば複数箇所、そういった場所を隠し持っていることは有益であるだろう。ただし、「一人になれる場所」の情報を大勢で共有することは、その目的上望ましくないと考えられるため、企画内で得た情報の扱いは慎重を要する。

ここまで「居場所」のことを述べてきたものの、「居場所」と銘打って企画することへの違和感も筆者は抱いている。居場所とはそのように明示的に「提供しますよ」というものではなく、求める側があれこれと行き来して試した結果、最も居心地の良い空間を呼ぶのではないだろうか。つまり、利用者が主体的に認めるものにすぎないのではないだろうか。そのような思いから、この3年間、「居場所」という文言を表に出すことはなかった。では、どういった表現が適切なのだろうか？引き続き考えていきたい事柄である。

3-2. 千駄ヶ谷キャンパスにおける展開

本稿で記してきたことは、すべて小平キャンパスにおける活動である。もちろん、千駄ヶ谷キャンパスの学生がこの居場所企画を利用することは可能であるし、千駄ヶ谷キャンパスに対する告知も行ってきているが、現在まで、キャンパスをまたいで参加者はみられない。2019年現在、千駄ヶ谷キャンパスにはインクルーシブ教育支援室のランチができておらず、また、ボランティア学生もいないことから、同様の活動を千駄ヶ谷キャンパスで展開するための準備は整っていない状況である。

しかしながら、千駄ヶ谷キャンパスには小平キャンパスとはまた異なる風土と雰囲気があり、特に、その規模と構造上の特徴から、「個人的居場所」が確保しにくいと見られている。そのため、千駄ヶ谷キャンパスの事情に合わせた、類似の企画をいずれは実施したいと願っている。2019年度、ウェルネス・センターでは千駄ヶ谷キャンパスにおける健康教育の出張講座を展開し始めており、限られたマンパワーの中で、新規企画の立ち上げ、栄養相談の拡大等を行い始めている。インクルーシブ教育支援室における「居場所」活動も、ウェルネス・センターの展開で得たノウハウを活かすなどして、少しずつ根付かせていくことを、今後考えていきたい。

文献

- 千島雄太・村上達也 2016 友人関係における“キャラ”の受け止め方と心理的適応—中学生と大学生の比較—教育心理学研究 64(1), pp.1-12.
- 花嶋裕久 2011 ひきこもりの若者の居場所と就労に関する研究 居場所から社会に出るまでのプロセス 心理臨床学研究 5(29), pp.610-621
- 原田克己・滝脇裕哉 2014 居場所概念の再構成と居場所尺度の作成 金沢大学人間社会学域学校教育学類紀要,6, pp.119-134.
- 石本雄真 2010 青年期の居場所感が心理的適応、学校適応に与える影響 発達心理学研究 21(3), pp.278-286.
- 永井暁行 2018 ソーシャルスキルと態度による大学生の友人との付き合い方の分類—友人関係による居場所感の違い—教育心理学研究 66(1), pp.54-66.
- 杉本希映・庄司一子 2006 「居場所」の心理的機能の構造とその発達の变化 教育心理学研究 54, pp.289-299.
- 吉村麻奈美 2007 学生相談でのグループ活動における学生側ニーズの把握 東京大学学生相談所紀要 16, pp.11-22.
- 吉村麻奈美 2019 女子大学におけるグループ・アプローチの模索 津田塾大学紀要 51, pp.137-154.

生活や学びに困り感を抱く学生さんへ

第1タームも間もなく終わりますが、大学生活のペースはつかめてきたでしょうか？

ひと区切りがつくこの時期、大学の授業や人間関係などに対して困り感を抱えている方は、第2タームの時期を利用して、大学生活をよりよく過ごすためのヒントなどを探ってみませんか？

毎週企画内容が違いますので、どうぞご自由に、気になる企画にいらしてみてください。

開催時期：第2ターム期間中の**毎週金曜日 12:15-13:30**

開催場所：7307教室（7号館3階） ※途中参加途中退室自由！

6月21日	1	生活や学びに関する質問部屋
6月28日	2	一人で休める場所探し(情報交換)
7月5日	3	生活や学びに関する質問部屋
7月12日	4	自己主張が苦手なあなたへ
7月19日	5	生活や学びに関する質問部屋
7月26日	6	不器用な人向け食事講座(実食つき) 「試してみよう！コンビニアレンジごはん」

「質問部屋」では、先輩たちの学業に関する知恵や、“これで困ったらこういう人に聞くといい”

といった、**学生生活のちょっとしたコツや工夫のシェア**ができます。



食事講座については、人数を把握したいのでできればここから申し込みをしてください



企画2、4、6については、質問紙やワークを通した**体験型のもの**になります。6以外は**申込不要**なので、お気軽にいらしてください！

津田塾大学インクルーシブ教育支援室
問い合わせ：inclusive@tsuda.ac.jp